

郷土学習と防災教育

——木曾三川流域の社会科副読本に着目して——

相澤 亮太郎

Community Learning and Education for Disaster Mitigation :
Focused on Supplementary Textbooks for Social Studies in Kiso-Sansen Area

AIZAWA Ryotaro

Abstract : The supplementary textbooks for social studies are educational materials for community learning. In the supplementary textbooks, we can see additional contents about local disasters. The author classifies the contents about disaster in a community as 1) risks and 2) historical. For instance, the aftermath of the disaster is described as a risk problem, and if the community doesn't have further disasters then it's described as a historical event. Revising the supplementary textbook will influence the education for the disaster mitigation. Municipal merger and revising curriculum guidelines have a big influence on updating the supplementary textbooks. Contents about local disasters are decreasing in the supplementary textbooks.

1. はじめに——防災教育のジレンマ——

2011年3月11日に発災した東日本大震災による途方もない被害を知るにつけて、我々の思考は、「被害を減らすことはできなかったのか」と反省し、「今何ができるのか」と逡巡し、「今後どうしたらよいのか」という方向へ向かう。近代化する社会を反省的主体¹⁾として生きる我々は、次なる災害から生命や財産を守るために、災害被災地から「教訓」を求め、備えようとする。本稿は、そのような問題意識を背景としながら、防災教育としての要素を持つ小学校中学年社会科の「身近な地域」単元において用いられる社会科副読本に注目し、その変容と地域的差異を検討するものである。

1995年の阪神・淡路大震災以降、防災教育への関心は一層高まり、2000年代には国民的課題として位置づけられるようになった。内閣府は平成18年に「災害被害を軽減する国民運動」²⁾を立ち上げ、防災の専門家のみならず、学校や家庭、企業における減災の取り組みを幅広く促している。学校での取り組みにつ

いては、「小学校、中学校、高等学校等の教育機関は、少年期からの教育が重要であることから、防災に関する教育の充実に努め、その際、郷土の自然災害の歴史等を学ぶ機会の確保に努める。」と述べ、各学校での防災教育及び郷土の自然災害の歴史を学ぶことに期待を寄せている。では、実際には学校現場での防災教育の取り組みはどこまで進んでいるのか。兵庫県教育委員会³⁾によれば、兵庫県内の小学校（回答数は761校）のうち、防災教育の年間指導計画を立案している学校は、平成11年度には60.6%であったが、平成21年度には94.5%となり、ほとんどの小学校が防災教育を年間指導計画に盛り込むようになった。またほぼ全ての学校で防災教育を担当する委員会や係が校務分掌に位置づけられ、防災訓練や防災関連の講演会（99.3%）、校内研修の企画・実施（75.8%）、校内安全点検（83.7%）、関係機関や地域との連絡調整（86.3%）、災害対応マニュアルの作成（94.5%）については、数多くの小学校で取り組まれていることが分かる。しかし、授業指導案の作成（26.0%）、資料収集や教材開発（61.7%）等、授業実践に関わる取り組みについては改善の余地が見られ、平成21年に地域の

学習素材を活用した教育実践や教材開発を行った小学校は 11.2% にとどまっている。

山形県内の学校を対象に防災教育に関するアンケート調査を行った村山良之⁴⁾によれば、アンケートに回答した 238 校のうち、84.5% が特別活動等で防災教育を実施しており、教科教育の枠内で防災教育に取り組む学校は 17.2% に過ぎない（複数回答可）。特別活動や総合的な学習として防災教育に割り当てられる時間についても、「3 時間以内」とする学校が半数を占めている。また岩手県内の学校を対象に防災教育に関するアンケート調査を行った牛山素行⁵⁾によれば、「仮に学校側は時間を提供するだけという条件で、防災教育に割り当てることができる時間」について、1 年間のうち 1～3 時間以内と回答した学校が 91.6% であり、多くの学校が、新たに防災教育のために時間を割り当てることが困難な状況にあることを示している。

それぞれの調査対象地は異なるものの、以上から指摘できることは、防災教育を求める社会的要請の高まりを受けて、学校現場では、安全点検や講演会、研修等の取り組みを進めているものの、地域を素材とした教材開発は難しく、また防災教育のために新たに時間を確保できない、という課題である。「災害被害を軽減する国民運動」の要請に対応するならば、「防災に関する教育の充実」は部分的に拡充しているものの、「郷土の自然災害の歴史等を学ぶ機会の確保」については大きな課題が残されていると言える。その点について筆者は、防災教育のために新たに時間を確保することが困難であるならば、学習指導要領に沿った教科の枠内で、「郷土の自然災害の歴史等」を学習することの可能性を検討したいと考えている。そこで本稿では、教科内容として地元地域の自然災害を扱う小学校中学年社会科における「身近な地域」の単元に注目し、そこで活用される社会科副読本の内容を比較・分析する。具体的には、輪中地域として知られる三重県、岐阜県、愛知県の県境にあたる木曽三川流域の各自治体において作成された社会科副読本を対象とし、記述内容を整理・類型化した上で、改訂による内容の変化を比較し、検討を行う。

2. 災害学習教材としての社会科副読本

副読本は教科書と異なり、文部科学省による検定を受ける必要がないため、比較的自由に編集することが可能である。そのため、各地域において、小学校中学年社会科における学習対象としての「身近な地域」

が、どのように表象され、子どもたちにどのように提示されているのかを把握することが可能となる⁶⁾。池俊介⁷⁾によれば、これまでの社会科副読本に関する研究は、①副読本のあり方に関する研究、②利用状況に関する研究、③内容分析に関する研究の三つに大別され、数多くの蓄積がなされてきたとされるが、防災教育の観点から社会科副読本を取り上げた研究は少ない。山田周二・鹿川紅美⁸⁾による、大阪府内で発生した水害履歴と、社会科副読本における水害関連記述を照らし合わせた研究では、最近の水害に関する記述よりも、歴史的な水害に関する記述が多く見られたことが報告されている。山田らによれば、社会科副読本の内容は、どこでどのような災害の危険があるのかという情報を掲載しているわけではなく、災害を経験したことのない子どもたちに災害を伝える手段としては不足があり、防災教育を進める上では、ハザードマップ等によって、現在の水害関連情報を積極的に提示することが重要であると結論づけている。これは、副読本における災害関連記述に着目した希少な論考である一方で、各地域で作成された副読本がどのような理由によって、どのように改訂されてきたのかという点については関心が寄せられてはいない。そこで本稿は、副読本の記述内容に地域的・年代的差異が生じる原因に関心を寄せ、水害履歴以外の要因を明らかにすることを目指す。

副読本を対象とする研究では、各自治体や教育委員会ごとに作成された副読本をいかに収集するのかという点が課題となる。副読本を継続的、網羅的に収集している機関等はほとんどないことが指摘されており⁹⁾、研究対象として社会科副読本を取り扱う上では大きな困難がある。本稿では、筆者が 2007 年に調査対象地域の公立図書館等に配架された社会科副読本を可能な限り閲覧・複写し、比較検討のための資料として整理した。収集した副読本の作成年代等は必ずしも均等ではないが、大まかに年代を揃え、内容を抽出し、表 1 のようにまとめた。

3. 木曽三川流域の地域的特徴

輪中地域として知られる木曽三川流域は、洪水と治水が繰り返されてきた歴史を持つ。木曽川以西に乱流した網目状の長良川や揖斐川の自然地形的な理由に加え、江戸初期、尾張徳川家の命により名古屋城下を水害から守るために木曽川左岸に長大な「御囲堤」が築堤されたため、木曽川右岸以西の美濃藩側に洪水が多

発するようになったとされる¹⁰⁾。度重なる洪水を防ぐため、村々では集落や田畑の周囲に輪中と呼ばれる堤防を築いてきた。江戸末期から明治初期にかけて、輪中の数は 80 以上を数えたという。また輪中堤防以外にも洪水を防ぐ努力は重ねられ、江戸中期には薩摩藩士らによる宝暦治水、明治中期にはオランダ人水理工師ヨハネス・デ・レーケによる木曾三川分流工事など、数多くの治水工事が取り組まれてきた。第二次大戦後は、動力機械の導入による湿地の埋め立てや河川改修工事、排水ポンプの整備が続けられてきた。しかし、洪水を完全に封じ込めることはできず、1959 年（昭和 34 年）の伊勢湾台風や、長良川右岸が決壊した 1976 年（昭和 51 年）の「9.12 水害」、2000 年（平成 12 年）の「東海豪雨」をはじめとして、大小さまざまな洪水被害は各地で発生している。

4. 輪中地域における社会科副読本の構成と災害関連記述の変遷

小学校中学年社会科の「身近な地域」単元は、地域の特徴や郷土の歴史を体系的に学ぶ数少ない機会である。表 1 に示したように、木曾三川流域の約 30 の自治体が作成した社会科副読本からは、数多くの災害関連記述を見出すことが出来る。以下、いくつかの観点から、社会科副読本に記載された災害関連記述について検討したい。

(1) 「過去の災害」と「現在の防災」

副読本における災害関連記述のほとんどが、郷土の歴史を紹介する章と地域の安全を紹介する章に登場しており、大まかではあるが、これらを「歴史としての災害」と「現在の安全対策」の二つに分類することができる。社会科副読本は、学習指導要領に準拠した教科書の内容に対応する形で作成されているため、前者の「歴史としての災害」は「郷土のねがい」「地域の発展につくした人」「水とのたたかい」などの見出しが付けられた章に見られ、後者は「安全なくらしを守る」「大水をふせぐ」「安心してらせるまちに」などの見出しが付けられた章に見ることができる。この二種類の記述を安全関連項目と歴史関連項目として分類し、副読本の内容を地図化したものが図 1 である（図中の◎○□△が安全関連項目、●▲■が歴史関連項目）。たとえば平成 5 年前後に作成された副読本の災害関連記に注目すると、多くの地域において安全関連項目としても歴史関連項目としても記載されているこ

とが分かる。

(2) 改訂による変化

多くの副読本では、(1) で示したように、現在の防災と過去の災害の両側面から記述されているが、副読本の改訂を個別に確認することで、次の二点について指摘することができる。ひとつは、災害関連の記述が簡素化する傾向である。表 2 で示したように、岐阜県大垣市では、昭和 50 年代に作成された副読本では、輪中の特徴や水防活動、水害の歴史や過去の功労者について、かなり詳細な記述が見られたが、時代が新しくなるにつれて、項目が減少し、記述が簡素化している。さらに、2002 年以降の副読本では、郷土の功労者の活躍を通じて水害を克服してきた記述に集約されつつある。これは、学習指導要領において指定された「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」¹¹⁾に対応した傾向であると考えられる。

副読本の改訂に関して指摘すべき二つめの傾向は、愛知県側の副読本において、防災関連項目が充実してきたという点である。表 3 で示したように、愛知県一宮市では、2002 年と 2007 年の改訂によって、「総合防災訓練」や「防災備蓄倉庫」「雨水貯留施設」「2000 年東海水害」といった項目が加えられた一方で、1986 年の副読本に示された「昭和 51 年の大雨」「尾張水害予防組合」「水防倉庫の位置」「濃尾地震」などの防災関連項目は削除されている。歴史関連項目についても、「入鹿池（の決壊）」「木曾三川分流工事」などは削除された。これは、2000 年の東海水害以後の新しい水害対策の取り組みや、東南海地震対策の進展が背景として考えられ、副読本における災害関連記述が改訂の度に更新・再構成される過程として理解することができる。

(3) 地域や年代によって変化する水害原因の説明

江戸時代に尾張藩側を水害から守るために木曾川左岸に築造された御囲堤について、岐阜県大垣市や三重県長島町、愛知県稲沢市等では、「御囲堤によって洪水が多発した」との記述がなされ、御囲堤が水害の原因であるとの説明がなされている。しかし、愛知県江南市では、江戸時代に築造された御囲堤によって木曾川の水害が減り、用水の整備と新田開発が進められたために、非常に豊かな土地となったという記述がなされている。同一の堤防をめぐる、地域によって正反対の評価がなされている状況を指摘することができる。また、岐阜県大垣市では、1970 年代の副読本で

表 1 木曽三川流域の各自治体が作成した社会科副読本の項目比較と変化

| | 宝暦治水 | | | | 明治の三川分流工事 | | | | 御囲堤 | | | | 新しい防災施設・体制の紹介 | | | | 水防団、水防倉庫、樋門等 | | | | 過去の災害の紹介 | | | | 河川や堤防の改修工事 | | | |
|-----------|------|------|------|-----|-----------|------|------|------|-----|------|------|------|---------------|-----|------|------|--------------|------|-----|------|----------|------|------|-----|------------|--|--|--|
| | S40s | S50s | S60s | H5s | H15s | S40s | S50s | S60s | H5s | H15s | S40s | S50s | S60s | H5s | H15s | S40s | S50s | S60s | H5s | H15s | S40s | S50s | S60s | H5s | H15s | | | |
| 岐阜県作成副読本 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岐阜市 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岐阜市島小学校 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岐阜市長森校区 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 各務原市 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 揖斐川町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 関市 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 池田市 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 本巣町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岐阜県 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 輪之内町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 養老町 | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | |
| 海津町 | | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| 大垣市 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | |
| 瑞穂市（穂積町） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 羽島市 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 安八町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 土岐市 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 神戸町 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 北方町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 美濃加茂市 | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 江南市 | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 大山市 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 一宮市 | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 尾西市（→一宮市） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 稲沢市 | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 愛知県 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 平和町（→稲沢市） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 祖父江町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 愛西市 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 立田村 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 佐屋町 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 木曽岬町 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 弥富市（弥富町） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三重県 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 桑名市 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

※凡例
 副読本が収集・確認できていない部分は灰色
 副読本の中に掲載されていない場合は無記入
 副読本の中に掲載されている項目は○

※本表は 2007 年 8-9 月に収集した副読本を元に、筆者が作成。

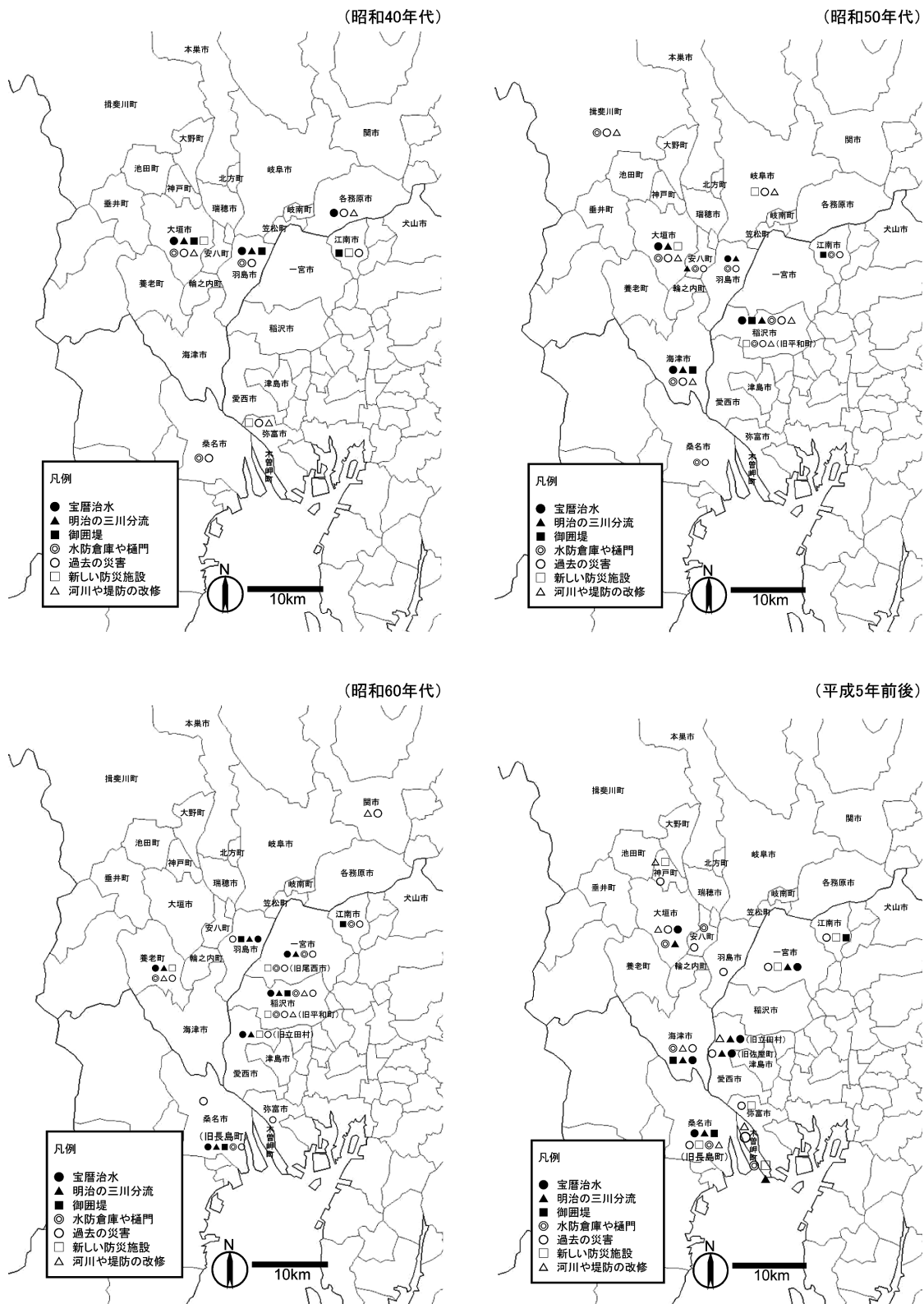
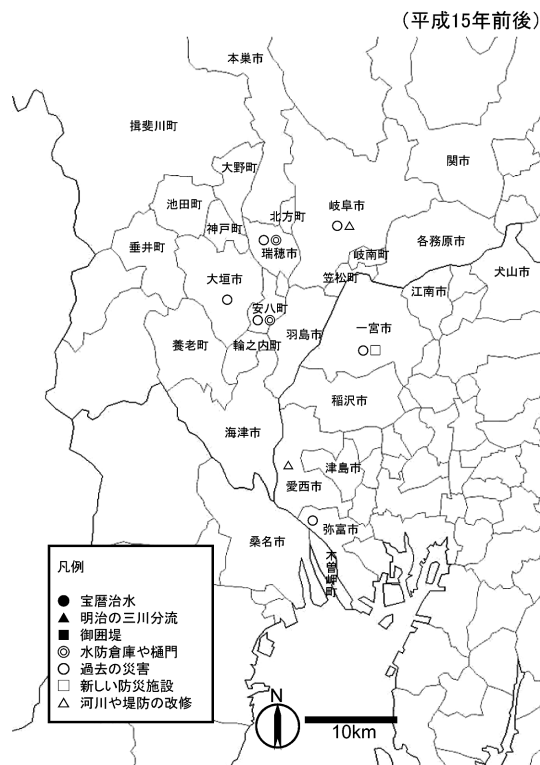


図1 木曾三川流域の各自治体が作成した副読本における水害関連項目の分類と分布



は御園堤を水害原因とする記述がなされていたが、2000 年代以降の版では水害の原因として上流部の山間地における森林伐採が水害の原因であるとして、森林保護によって水害を防いだ功労者を顕彰する内容に

改訂された。これは (2) で指摘したように、学習指導要領の改訂によって先人の功労に注目することが重視された結果であることに加え、現代的な課題として森林保護等の環境保全の観点が重視されるようになったことを背景として指摘することができる。

(4) 市町村合併による変化

平成の大合併と呼ばれる市町村合併によって、2005 年に愛知県佐屋町、佐織町、立田村が合併して成立した愛西市の社会科副読本における災害関連記述は、表 4 の通りである。旧町村である立田村や佐屋町ではそれぞれに、宝暦治水やヨハネス・デ・レーケについての記述、伊勢湾台風災害に関する記述が見られたが、合併後の記述は旧町村からそれぞれ代表的な先人を 1 名ずつ取り上げて顕彰的な記述がなされるのみとなった。また伊勢湾台風による被害状況やその後の水害対策について多くの頁を割いてきた三重県長島町は、2004 年に市町村合併によって桑名市と合併し、災害関連の記述は大幅に削減された。合併後に作成された平成 17 年度版では、「ほかのまちはどんなまち」という節において、見開き 1 頁で旧長島町の産業や伊勢湾台風の被害について、数点の写真を掲載し簡略な説明がなされているのみである。

表 2 岐阜県大垣市の社会科副読本に掲載された災害関連項目の変化

| 1970 年代 | 1980 年代 | 1990 年代 | 2002 年以降 |
|---|--|---|---|
| 第 5 章 水とのたたかい 1. 濃尾平野のくらし 2. 輪中の米づくり 3. 水害と治水工事 ①河川と輪中 イ. 地図を眺めて ロ. 輪中の形成 ・世界的に珍しい輪中地域 ②水害の惨禍とその要因 ・御園堤/明治 29 年の水害 ・昭和 34 年 8 月の集中豪雨 ・昭和 34 年伊勢湾台風 ロ. 河川の変遷ハ. 惨禍の要因 ③治水のあゆみ イ. 大垣藩の治水事業 ・水門川/水門の築造/大垣藩の治水 ・水防の実績/鶴森伏越樋 ・伊藤伝右衛門/大垣藩の治水請願書 ロ. 薩摩藩の宝暦治水 ハ. 3 川下流, 上流改修工事 ・治水の功労者, 金森吉次郎 二. 現在の水防 ・杭瀬川改修工事/水門川排水機増設工事 ・横曽根の連合樋口/横山ダム ・水防の組織と活動 4. 輪中の開拓 イ. 埋め立て, 干拓 ・南部埋め立て干拓事業/浅草干拓事業 ・綾里地区埋め立て, 干拓事業 ②用水のしごと ハ. 排水のしごと | 第 8 章 安全なくらし ・昭和 51 年 9.12 水害 (1) 大水をふせぐ ・堤防をまもる ・たいせつな水防倉庫 ・排水機のはたらき ・新しくなった水防倉庫 ・大水をふせぐ努力 ・もっと強い堤防に 第 10 章 きょう土を開いた人びと (1) 大水に苦しんだ大垣輪中の人たち ・大水のようす/大水のひ害 ・木曾三川と杭瀬川/降水量 ・土地の高さと水のついたところ ・水屋の見学/見学のまとめ ・人々のねがい (2) 治水に努力した人びと ・清水五右衛門/伏越樋の計画 ・工事のようす ・伊藤伝右衛門と伏越樋 ・三川分流工事/金森吉次郎 (3) 発展する大垣 土地改良 大垣南部の農業のようす なくならない大水の心配 | 第 7 章 安全なくらしを守る ・消防団と水防団の働き 第 8 章 きょう土を開く (1) きょう土のはってんにつくした人々 ・木曾三川と杭瀬川 ・土地の高さと水のついたところ ・水屋 ・人びとのねがい ・清水五右衛門 ・伏越樋のくふう ・伊藤伝右衛門 ・三川分流工事 ・金森吉次郎 ・治山治水 (2) 新しい町づくり ・今もつづく努力 ・水や川を生かす ・これからの町づくり | 第 3 章 安全なくらしをまもる (3) 安心してらせるまちに 第 5 章 市の人びとのくらしのうつりかわり (3) きょう土のはってんにつくした人びと ・市をとりまく川 ・土地の高さと水のついたところ ・人びとのねがい ・伏越樋のくふう ・伏越樋を考えた伊藤伝右衛門 ・治山治水につくした金森吉次郎 ・堤防を切りわる ・植林をすすめる |

表3 愛知県一宮市の社会科副読本における災害記述の変化

| | | |
|---------|--|--------------------------|
| 昭和 61 年 | 「安全な生活をまもる」昭和 51 年の大雨、尾張水害、予防組合、水防倉庫の位置、濃尾地震 | 「きょうどを開いた人々」入鹿池、木曾三川分流工事 |
| 平成 14 年 | 「くらしをまもる」濃尾大地震、総合防災訓練、2000 年東海水害 | 「きょうどにつたわるねがい」木曾三川分流工事 |
| 平成 19 年 | 「くらしをまもる」2000 年東海水害、雨水貯留施設、総合防災訓練、防災備蓄倉庫 | 記述なし |

表4 愛知県愛西市の社会科副読本における災害記述の変化

| | |
|------------------|---|
| 平成 14 年（合併前の立田村） | 「地域のはってんに尽くした人」ゼロメートル地帯、宝暦治水、三川分流、ヨハネス・デ・レーケ、植林とダムづくり、福原の父太平衛 |
| 平成 14 年（合併前の佐屋町） | 「地域のはってんに尽くした人」新田開発の服部茂左右衛門、工事の苦労と青樹英二、木曾三川分流工事と排水機場、伊勢湾台風 |
| 平成 18 年（合併後の愛西市） | 「地域のはってんに尽くした人」新田開発の服部茂左右衛門、排水機場づくりの青樹英二、福原開拓の太平衛 |

5. 結 論

ここまで、木曾三川流域の社会科副読本に掲載された災害関連記述を比較検討してきた。1. で述べたように、現在の学校現場では、防災教育に関わる内容のうち「郷土の自然災害の歴史等を学ぶ機会」を新たに確保することが困難である。そこで本稿では、既存の教科の枠内で身近な地域の災害がどのように取り上げられているのかを明らかにするため、社会科副読本における災害関連記述に注目した。社会科副読本における災害関連の記述は、安全関連項目と歴史関連項目に分けられ、たとえば 2000 年の東海水害をふまえた安全関連項目が新たに加わるなど、地域の実態を反映しながら副読本の内容は再構成されている。多くの地域では、大きな災害直後は災害関連の記述が増加するが、時間が経過すれば、災害関連の記述は省略されていく。また学習指導要領の改訂によって、郷土の歴史が「先人の活躍によって地域が良くなった」という形式で提示されるようになったため、水害の問題は解決したような印象を与える可能性がある。歴史関連記述において、御囲堤が水害の要因であると述べる副読本がある一方で、御囲堤によって地域が豊かになったと記述するものもあり、さらには、改訂によって、御囲堤についての記述から上流部の森林破壊が原因であるとの記述に変更された大垣市のような例もある。郷土の歴史における災害の要因に関する記述は、多面的かつ可変的な側面がある。災害関連記述の可変性は、市町村合併を通じて顕著に現れており、よりローカルなスケールの旧町村の記述は、合併によって省略ないし消滅している。つまり「郷土の自然災害の歴史等を学

ぶ機会」は市町村合併によって失われる傾向が強く見られたと言える。木曾三川流域は長年洪水被害を被ってきた地域であり、他地域に比べれば水害被害や防災関連の内容を多く記述しているものの、その内容は全体的には削減ないし省略される傾向にあり、また市町村合併や学習指導要領の改訂によって、災害関連記述は一層減少している。

2011 年度に改訂された小学校教科書のいくつかには、津波防災教材として知られる『稲むらの火』¹²⁾が採用されている。『稲むらの火』を通じて、津波から避難することの大切さを学ぶことができるが、災害被害を軽減するためには、「身近な地域」の実態を反映した「郷土の自然災害の歴史」を学ぶ必要がある。筆者は 2011 年 8 月に、宮城県内で作成された社会科副読本における災害関連記述を確認する機会を得たが、多くの地域では、過去の津波被害をわずかな紙幅で紹介するに過ぎず¹³⁾、地域社会が壊滅する可能性がある津波災害のリスクと学習内容が対応していない状況が見られた。東日本大震災以後、防災教育の必要性がますます叫ばれているものの、子どもたちに何をどのように学ばせるのかについては、未だ明確な方向性は打ち出されていない。同じ地域で繰り返し発生する自然災害の被害を減らすために、過去の災害を知り、危機意識を持ち、判断力と行動力を身につける防災教育の普及を進めなければならない。だが、社会科副読本における「郷土の自然災害の歴史等を学ぶ機会」は、既に本稿で示したとおりである。災害から生命と財産を守るために、既存の教科の枠内だけでなく、学校内外での防災教育の可能性を含め、幅広く模索していく必要がある。

注

- 1) ウルリッヒ・ベック, スコット・ラッシュ, アンソニー・ギデンズ (松尾精文・叶堂隆三・小幡正敏訳)『再帰的近代化－近現代における政治, 伝統, 美的原理－』而立書房, 1997 年
- 2) <http://www.bousai.go.jp/km/index.html>
- 3) 兵庫県教育委員会教育企画課「防災教育に係る実態調査集計 (平成 21 年度)」<http://www.hyogo-c.ed.jp/~somu-bo/bosai/H21jittaichosa1.pdf>
- 4) 村山良之「山形県の学校における防災教育の実態と課題」, 山形大学教職・教育実践研究 4, pp.83-92, 2009 年
- 5) 牛山素行「岩手県における学校防災教育の実施状況について」津波工学研究報告第 26 号, pp.85-95, 2009 年
- 6) 副読本の使用については現場教員の判断に任せられていることが多いため, 社会科副読本が, 必ず「身近な地域」単元の学習教材として位置づけられる保証はない。しかし, 社会科副読本の編集過程には地元教員が参加するケースが多く, 子どもたちに学ばせたい「身近な地域／郷土像」が示されていると筆者は考え, 本稿では検討対象として取り上げている。
- 7) 池俊介「市町村合併に伴う社会科副読本の課題」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 18 号, pp.1-14, 2008 年
- 8) 山田周二・鹿川紅美「大阪府の水害履歴と小学校社会科副読本における水害に関する記述」大阪教育大学紀要第Ⅱ部門第 54 巻第 22 号, pp.1-11, 2006 年
- 9) 森脇健夫・石川一恵, 白井正幸, 中井重勝, 立花昇「大阪府下の小学校 3・4 年生社会科副読本の比較研究」大阪教育大学紀要第Ⅴ部門第 38 巻第 2 号, pp.157-174, 1989 年
- 10) 安藤萬壽男『輪中－その展開と構造－』大明堂, 1975 年。安藤萬壽男『輪中－その形成と推移－』大明堂, 1988 年
- 11) 小学校学習指導要領第 2 章第 2 節社会第 2 各学年の目標及び内容 3 内容の取り扱い (6) において「内容の (5) のウの「具体的事例」については, 開発, 教育, 文化, 産業などの地域の発展に尽くした先人の中から洗濯して取り上げるものとする。」とある。
- 12) 1854 年の安政南海地震の被害を受けた和歌山県広川町 (旧広村) の商人であった浜口梧陵が津波被害から村人を救った史実を題材とした作品として知られる。戦前の国定国語教科書に掲載されていたが, 2004 年のインド洋大津波後に再注目された。2011 年度新たに改訂された国語 (光村図書, 5 年生) や社会科 (日本文教出版, 3・4 年生下) に取り上げられている。なお広川町には 2007 年に, 浜口梧陵の顕彰と津波防災教育を目的とした「稲むらの火の館」が完成している。
- 13) 三陸海岸における災害学習教材については, 別稿に執筆予定である。